



中西 準子

なかにし・じゅんこ  
工  
学博士。横浜国立大学名誉  
教授。環境リスク評価。文  
化功労者。76歳。

新型インフルエンザでかなり騒然  
としていたのは5年ほど前だったで  
あろうか。今年は、夏にデング熱が  
問題になり、秋になってエボラ出血  
熱が世界中の耳目を集めている。世  
界保健機関(WHO)は、11月2日  
までの死者が4818人でほぼギニ  
ア、リベリア、シエラレオネの3国  
に集中していると発表した。

エボラ出血熱が怖がられる理由  
は、それに罹患した時の死亡率が高  
く、最後の姿がひどく悲劇的だとい  
うことであろう。皆が思い描く最後  
の姿が、実像が作られた映像かはは  
っきりしないが、いずれにしろ、目  
や鼻や傷口から出血するイメージが  
恐怖を増大させている。  
病原となるウイルスの自然宿主は  
コウモリと言われているので、動物  
体内での増殖と感染はありうるが、  
今のところ、コウモリ以外の動物体  
内での活発な増殖反応は見つかって  
いない。マラリア原虫を媒介するハ  
マダラカがエボラも媒介するという  
説もあるが、宿主としてはなく、  
ただ感染者の血液を運ぶという意味  
だけである。鳥や虫が宿主になって  
媒介する可能性はきわめて小さく、  
唯一心配すべきは感染した人間の移  
動である。しかし、感染は体液の接

触がないと起きないことから、人か  
ら人への空気感染はほぼないので、  
実は感染率は非常に低い。  
この病気が発見されたのは、今か  
ら40年近く前で、全く新しいわけ  
もなく、これまであまり大きな問題  
にならなかった。それが、今、あら  
たに注目を集めるようになってい  
るのは、何よりも、その発生源である

だからといって日本は何もしなく  
ていいというのではない。が、すべ  
てのリスクに最大限対応することは  
できないので、感染の経路とリスク  
の大きさに見合った対策かというこ  
とが問題である。

エボラ出血熱の対策としては、発  
生している西アフリカの国々での対  
策と、日本に入ってくるのを止める  
の効果はそれほど高いとは思えな  
い。新型肺炎(SARS)の際の水  
際対策の効率は高くなかったこと  
が英国の調査でも分かっている。し  
たがって、空港をすり抜けた場合に  
も、感染拡大を防ぐ対策が必要にな  
る。この場合には、他のウイルス対  
策との兼ね合いになるので、リスク  
はやや大きくなる。それをゼロにす

エボラ出血熱の広がっている地域  
は、マラリア多発地域と重なってい  
る。マラリアによる死者は相当減っ  
てきたが、それでも年間約60万人、  
罹患者は約2億人。筆者は、ブラジ  
ルのアマゾン川流域で水銀汚染調査  
に参加したことがあり、マラリアの  
感染に非常に気を使った。しかし、  
マラリアはハマダラカがマラリア原  
虫を感染させ、人が持ち運ぶわけ  
ではないので、マラリア罹患者が日本  
に戻ってきたからと言って、日本で  
マラリアが流行するわけではない。  
だからと言って、これだけ死者の多  
いマラリアには無関心で、エボラ出  
血熱のみ大騒ぎをするのはいかが  
なものか。

## エボラ出血熱 水際対策に違和感

西アフリカとの人的交流が増加して  
いる状況を反映している。またこの  
病気に最も強い関心を示しているの  
がイギリス、フランス、米国である  
ことも、これらの国との関係の深さ  
を考えれば当然である。わが国の深  
刻度は、それらの国とは比べものに  
ならないほど低いのだが、英仏米の  
動きにつられて大きな騒動になって  
いるともいえる。

水際対策と、かつ、入ってしまった  
場合の感染拡大を防ぐ方策が必要で  
ある。とりあえず、後者二つについ  
て考えると、今は、空港で止めると  
いう水際作戦に国も、マスコミも集  
中している。

しかし、潜伏期間が長い。加えて  
本人からの自主申告であり、帰国者  
に過大な義務を負わせることも不可  
能であることを考えると、この政策  
することは不可能で、その程度のリス  
クは甘受せざるをえないだろう。  
一人でも病人が空港を出たら管理  
に問題があったとするような評価  
や、病人に備えてあまりにも厳格な  
対策を用意することは、少なくとも  
日本におけるエボラ対策としては不  
適当ではないか。その対策に費用と  
人員をかけ過ぎれば、他のリスク対  
策がおろそかになるからである。

われわれは、何らかの経済的な利  
益を求めてアフリカに行き、病気を  
拡大させている。水際対策で日本に  
入ってこなければ良いというだけの  
大騒ぎには、どうしてもついてい  
けない。